

一つの領域で突き抜ける



大久保幸夫さん。人前で話すのが苦手な自分を変えようと、大学では落語研究会で猛練習した

宅していた。友達がいなかったのかというと、そんなことはない。「周りが僕をフォローしてくれていました。口数も少ないし、いじめがいないんですよ」

成績優秀な生徒が集まる土浦一高にあって、リクルートワークス研究所所長の大久保幸夫さん(55、1979年卒)は得意科目とそれ以外の成績が極端に違った。好きな数学と古文、そして美術だけに取り組んだからだ。

美術系の大学へ進むとうと美術史を学ぶと、画家たちは10代で才能を開花させていた。もう遅い、とあきらめて、経済のしくみを作る国家公務員を目指し「橋大学」へ。

数学は自分なりの解法を考えるのが楽しく、絶版の難問集を探してきて解いていた。古文も古典文学を楽しみ、勉強という感覚ではなかった。絵は小学生からモネの絵を精密に模写する腕前だ。

しかし、官僚になった先輩と話すとき魅力を感じず、世の中のしくみやルールを作ることができそうだとリクルートに入社した。

やりたいうことがたくさんあるの、さっさと帰

「好きなことを、誰よりもうまくできるまでとことんやった。一つの領域で突き抜けた経験は貴重。積極的に変わり者になってくださった」

半導体メーカー、ザイ



「土浦一高の先生は優秀で、とても信頼していました」
大久保幸夫さん

ンエレクトロニクスの代表取締役会長の飯塚哲哉さん(69、66年卒)は、小学4年生のころには真空管ラジオ作りで徹夜してしまっほどの「工作少年」だった。エンジニアへの道は始まっていた。茨城県荖崎村(いまのつくば市)の生まれ。両親の教育方針で、中学からは1人で土浦市の知人の家に住み込み、土浦第一中、一高へ通った。この経験が、場所への執着心のなさにつながったという。

高校時代は物理や数学が得意で仲間と物理部を作った。東京大学受験の際は先生も「君の成績で落ちた人はいない」と太鼓判を押した。

東大工学部、東大大学院(電子工学)を経て東芝に入社。半導体開発部門のトップとなり役員候補とも言われたが、44歳で会社を辞めて起業した。入社6年後に米シリコンバレーの研究所に交換研究員として赴任し、そこで技術者が起業する姿を見たことがきっかけだった。

「興味の赴くままにやりたいことを追いかけてきました。若い人たちも、もう少しわがままになっていいんじゃないかな」

(編集委員・吉田由紀)

◇ 今回は、山形県立山形高等学校です。